

「社会貢献の意識向上を スポーツの価値巡る議論進む」

スポーツ界と学术界でそれぞれ指導的立場にある人たちが、スポーツの真の価値は何かを巡り議論を重ねている。10月3日に日本学術会議講堂で開かれた同会議主催の学術フォーラム「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」でも、さまざまな意見が飛び交いスポーツの役割がますます複雑化していることをあらためて印象づけた。スポーツが時代の要請で変容し、多くの大衆の支持を受ける一方、失った魅力もあるのでは。こうした疑問に対する答えとして、スポーツ界の社会貢献の重要性ということが感じられた議論でもあった。日本学術会議は、鈴木大地スポーツ庁長官から「スポーツの価値」に関して審議を依頼されている。これに対する答申と、東京オリンピック・パラリンピックに向けた提言を来年初めにまとめることを目指し、日本学術会議は引き続き議論を進めることにしている。



日本学術会議学術フォーラム「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」(10月3日、日本学術会議講堂)

2018年11月15日付で鈴木長官から山極壽一日本学術会議会長に出された審議依頼は、

2020年7～9月に開かれる東京オリンピック・パラリンピックの後を視野に入れたスポーツ振興のための科学的な助言を求めている。「日常生活の中でスポーツに親しむことが、個人と社会にどのように貢献し、便益をもたらすか」、「スポーツの価値を高め、普及していくためのスポーツ政策とは」といった具体的な検討課題が挙げられており、日本学術会議は科学的知見に基づく回答を求められている。



審議依頼書「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方に関する審議について」を鈴木大地スポーツ庁長官（右から2番目）から受け取る山極壽一日本学術会議会長（左から2番目、日本学術会議提供）

勝つこと以外のスポーツの意義とは

今回、開催された学術フォーラム「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」では、山極壽一会長（京都大学総長）、渡辺美代子副会長（科学技術振興機構副理事）のほか、日本学術会議の連携会員、特任連携会委員がパネリストとして参加した「勝利に向かう一元的価値から多様な価値を承認する社会へスポーツと科学ができること」というテーマのパネルディスカッションが設けられた。



喜連川優国立情報学研究所長・東京大学教授（右）。左は渡辺美代子日本学術会議副会長

「スポーツは、上手(じょうず)か下手(へた)か、勝ったか負けたかが、誰が見てもよく分かる。全ての世代が共感できるというのがスポーツの価値ではないか」。IT(情報技術)が専門の喜連川優国立情報学研究所長・東京大学教授の発言に続き、高瀬堅吉自治医科大学教授(心理学)も、多くの人にとってスポーツをやるのが楽しみだけでなく、目標達成という行為を通じて人としての成長にもつながるというスポーツの効用を強調した。喜連川が自身は子供のころからスポーツをするのは不得手というのに対し、高瀬氏は、中学時代からバスケットボールを始め、今でも楽しんでいるという。



高瀬堅吉自治医科大学教授（左）。右は田嶋幸三日本サッカー協会会長

山極氏からも「見ている人間も自分も解放された気になり、やっている人も自分の素晴らしいプレーや美しい姿に大勢の人が共感、同調してくれるという喜びがある。これが学術の世界などにはないスポーツの醍醐味」とスポーツの価値を認める発言が続いた。山極氏も高校時代バスケットボールをするなど自身もスポーツを楽しんできた。一方、勝ち負けに関しては、山極氏が次のような考えを示している。「勝ち負けが徹底している戦争とスポーツは似ている面があるが、スポーツは勝った方が負けた方に代償を求めないところが大きな違い。ただし、それを可能にしているのはスポーツマンシップであり、スポーツマンシップをどう維持していくかが大事だ」



山極壽一会長（右）。左は田嶋幸三日本サッカー協会会長

ゴリラの研究でも知られる山極氏は、「負けたくないが、勝たなくて引き分けでよいというのがゴリラの感覚。人間の日常生活も引き分けが多い。勝つというのはスポーツにおいてもストレスを伴う。スポーツで勝っても、もし他人から賞賛されることがなければ、孤独になるだけだろう」と付け加えた。女子柔道の草分け的存在で多くの輝かしい実績を持つ山口香筑波大学教授も「アスリートは決して健康な人ばかりではない。プレッシャーも大きいし」と山極氏の主張に同調した。ただし、山口氏は「試合に負けた場合でも、すぐ忘れて次の試合に向けて気持ちを切り替えた」と自分自身はプレッシャーをあまり感じなかったことを明らかにしている。むしろ、「自分でやったことには責任を取るという自主自立の精神がスポーツを通じて育まれる」と、高瀬氏同様スポーツの効用を強調した。



山口香筑波大学教授（中央）。左は山極壽一日本学術会議会長、右は來田享子中京大学教授

勝つということがストレスを伴うという山極氏の言葉にもう 1 人同調したのは、サッカー選手として活躍し現在は指導的立場にある田嶋幸三日本サッカー協会会長。日本サッカー協会はプロ、アマ合わせ日本サッカー界を統括する大きな団体だ。田嶋氏が強調したのは、サッカーチームの指導者たちのストレスが特に大きいこと。「チームのトップにはものすごいプレッシャーがかかる。試合の最終場面では、勝ち負けよりとにかく早く試合が終わってくれという気持ちになることが珍しくない。指導者たちの近くにいる自分は、彼らがとにかくストレスから解放されたいと思う気持ちになることはよく分かる」。勝つことがスポーツの醍醐味、とは言い切れない厳しい現実があることを、田嶋氏は明かした。



来田享子中京大学教授（右）。左は山口香筑波大学教授

社会、時代とともに変容したスポーツ

もう一つ議論のテーマとなったのは、スポーツが社会の要請によって時代とともにどのように変容してきたか。山極氏は、ゴリラの研究でよく訪れたアフリカの村でサッカーが一番人気のあるスポーツになっている様子を紹介した。隣村との試合がよく行われるが、勝ち負けは二の次のお祭になっている。試合は一日中、和気藹々と続き、終わると、試合を話題ににぎやかな宴会になる、という。一方、スポーツ科学、スポーツ史が専門の来田享子中京大学教授は、スポーツは高い階層の人々の楽しみとして始まり、基本的な精神に「ノブレス・オブリージュ」（高い身分の保持に伴う義務）があったことに注意を促した。1920-1930年代に大衆化して以来、スポーツがさまざまな価値観を取り込み、時代、社会の変化によってさまざまな軌轢も生んできた歴史があることも指摘した。

スポーツが変容してきた例として田嶋氏が示したのは、欧州のプロサッカー界の勢力図。年間 1,000 億円もの資金を集めるような経済力を誇るレアル・マドリードやマンチェスター・ユナイテッドのようなチームが、強さでも最上位にある現状を示し、サッカーが成熟したスポーツになっている社会では必然の現象といえるとの見方を示した。一方、日本では資金力の大きなチームが最も強いわけではない。これは日本のサッカー界が未成熟の段階

にあるから、と氏はみている。一方、巨大な資金力を持ち実力も最上位にある欧州のサッカーチームが来日した際、選手たちが真っ先にとった行動は福祉施設への慰問だった。田嶋氏は一方でこうした事実も紹介し、欧州の強いサッカーチームが勝つことだけでなく社会貢献を重視しているに注意を促した。

山極氏も勝ち負け二の次でサッカーを楽しんでいるアフリカの村人たちにも、欧州のサッカーの試合に大きな関心を寄せていることも明らかにしている。欧州の有力チームで活躍するアフリカ出身のサッカー選手たちの活躍ぶりを、ラジオで熱心に聴き、応援しているという。一方、アフリカ出身の有名選手たちが故郷に帰ってきたときは、航空機のタラップから出迎えた人々に札束をばら撒くなど、地域への金銭的な還元行為をしていることも紹介した。

経済の集中や格差拡大が進む現代社会の現状を突き破るような魅力がスポーツにはあると期待されているのに、スポーツは逆に現代社会の縮図になっているのではないか。フォーラムでは、このような趣旨の問題提起が会場の参加者からあった。

「スポーツ界は社会貢献という意識をもっともっと高めていかないといけない。企業も強いチームにするために資金を投入するだけでなく、社会貢献するチームにもお金を出してほしい。こうした観点から見ると日本のスポーツはまだ成熟していないのではないか」。田嶋氏はこのように指摘しており、社会貢献がスポーツ発展のキーワードであることをうかがわせた。



田嶋幸三日本サッカー協会会長（中央）。右は山極壽一日本学術会議会長、左は高瀬堅吉自治医科大学教授

暴力、暴言問題の議論は今後

日本学術会議は、今年 1 月にもスポーツ関係の学会と共催でスポーツに関するシンポジウムを開いている。「我が国におけるスポーツの文化的アイデンティティ再考」と題するこのシンポジウムは、日本のスポーツ界の現状に対する厳しい認識の下に開催された。「近年、日本のスポーツ界では常軌を脱した不正行為（パワハラ、セクハラ、わいせつ・強姦、暴力、窃盗、薬物等々）が繰り返され、病めるスポーツの姿が露呈している」、「スポーツ関係者たちの一連の誤りは、現代日本のスポーツが内包する諸特質と諸制度に起因する文化的未成熟性によるものと推察される」といった記述がシンポジウム開催趣旨の中に見られる。



シンポジウム「我が国におけるスポーツの文化的アイデンティティ再考」で発言する坂本拓弥筑波大学体育系助教（左）。右は鈴木明哲東京学芸大学教育学部教授（1月12日、日本学術会議講堂）

実際にシンポジウムでは、日本の現状に対して厳しい発言が相次いだ。坂本拓弥筑波大学体育系助教は、「競技スポーツには、常に勝ちたいという欲望が存在する。暴力という行き過ぎた指導は、指導者の『勝たせたい』と本来の目的が『勝ちたい』という欲望に変わってしまう結果に起因する。何のために指導しているか気づいていない指導者によって、選手（生徒）は指導者の欲望を実現するための道具と化してしまう」と指摘した。

鈴木明哲東京学芸大学教育学部教授からも、これまでの体育・スポーツ史の研究スタイルに対する反省が示された。「進歩」や「発展」への貢献度を重視して、優秀な選手、監督、コーチたちばかりを研究対象にしてきた結果、末端でスポーツをしてきた無数の無名の人々が見えてこない、という。「危機や闇に瀕しているのはこのような末端で体育・スポーツの歴史を支えてきた人々。誰が体育、スポーツをし、その歴史を積み上げてきたか、という視点に立った研究に立ち返るべきだ」と鈴木教授は提言していた。

今回のシンポジウムでも田嶋氏から「暴力を振るったり暴言を吐いたりする指導者が依

然としている。こういう人たちは自分自身が指導者から暴言を浴びせられたことで発奮して成長したという自身の成功体験から抜け出せない。暴力は意味がないことをきちんと説明するエビデンスがほしい」という現状紹介と、学术界に対する強い期待が表明された。指導者の暴力や暴言問題への対応策は、鈴木スポーツ庁長官の日本学術会議に対する審議依頼にも含まれている。次回のフォーラムの主要なテーマとする、という意向が今回のフォーラムで渡辺日本学術会議副会長から示された。

日文 小岩井忠道 (JST 客観日本編集部)

関連サイト

日本学術会議主催学術フォーラム「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方」

<http://www.scj.go.jp/ja/event/pdf2/279-s-1003.pdf>

日本学術会議「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方に関する委員会設置提案書」

<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/sports/pdf/24setti.pdf>

スポーツ庁「科学的エビデンスに基づく『スポーツの価値』の普及の在り方に関する審議について(依頼)」

<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-181115shingi.pdf>

関連記事

2019年01月29日「日本就体育界黑暗面召开紧急研讨会：杜绝肢体暴力和语言暴力需持续努力」

http://www.keguanjp.com/kgjp_jiaoyu/kgjp_jy_gdjy/pt20190129060000.html

2018年12月07日「5年本硕连读，日本国际基督教大学进一步加强博雅教育」

http://www.keguanjp.com/kgjp_jiaoyu/kgjp_jy_gdjy/pt20181207060003.htm